



一貫コース通信

学校休校の間に読んだ本の事（2）

やっと生徒達が戻って来た。生徒在っての学校であり、生徒達の溢れる声や活気が常態化し嬉しい限りである。ここでは前回に引き続き一読しておきたい良書を紹介したい。



初めに挙げるのは RECRUIT“スタディサプリ”（三賢人の学問探求ノート）である。結論から言えば、この書籍は、マニュアル本や How to 本の部類に入るかも知れない。

今の日本は良くも悪くも効率を優先する。その為、事の本質はさて置き、努力は最小に、結果は最大値を求める傾向が大になった。それが高じ、分野の別なく“近道（ちかみち）のマニュアル本”が数多（あまた）存在する。勿論、中には本質を欠くモノも多いが、次に挙げる『人間を極める』・『社会を極める』・『生命を極める』の3冊は、その限りではない。各界一流のプロ3名ずつを抽出し、出筆依頼をしたのだろうか。人選の確かさも在り、読む者を圧倒する。故“井上ひさし”氏の言葉、難しい事を解り易く…を体現していると言って過言ではない。思うに、出版元の意図は、中・高生の進路選択の一助なのだろうが、それに止まっていない。大人のビギナー向けに、ハイレベルの教養書として十分な内容を持っている。端的に言えば、高度化複雑化する社会に在って、自の専門外の分野をのぞける絶好書と言えるかも知れない。

次の書籍は、採りあげるべきかどうか、正直迷ってしまった。しかし、著者は教育の現状を、どの識者よりも真面目に考えて来たと思うので紹介する。それは内田樹著・文藝春秋『サル化する世界』である。表題は…ウッキーの🐒である。本書は教育書ではない。しかし、かなりの頁を日本の教育に割いている。蛇足だが、内田氏は『街場の教育論』や『先生はエライ』他と、多くの同脈絡の本を書いて来た。戻るが、例えば外国語教育(4 技能教育)については、ご自分の経験則を踏まえ舌鋒は鋭い。今日の教育で、日本の将来はどうなってしまうのか…の憂いと嘆き、しかし、同等の諦め(楽観?)を含む。私は、専門外なので論は交わせないが、語学分野の碩学の知見なので、そういう考えもイイね！と頷くしか無い。氏は、唯々（ただただ）、今の指導で（そんなやり方で）生徒のやる気を出せるの？本当に好きに、させられるの？…と素朴な疑問を投じる。それは、私達のどの教科にも共通する本質だが、実際には自問自答出来るヒトだけが、自覚するに違いないと。また、敢えてここでは扱わないが、龍本哲史氏の講演を本にした著書『2020年6月…ここで会おう』の中で、龍本氏が聴衆に対し、“人のふりした、サルになるな”と呼び掛けるシーンは、実に感動的だ。ここで発せられたサルは、先の🐒と同意なのだが、元々、人と猿(最近縁種チンパンジー)とのDNAの違いは2%に過ぎない。しかし、この僅かの違いが、人としての特性を発現させるのであり、中でも、他人を思いやる心、過去・未来に思いを馳せる等々、サルとは異なる情緒・創造力の源泉である。サルの行動は本能の赴くまま、Me first(ミー・ファースト)であり、そこに高度の思考や判断は伴わない。その意味で、ミー・ファーストが増加傾向の昨今、二著は警告書とも取れるのだ。